

手が心を計る役割りをするだって？ 実に妙なことをと思われるかもしれないが、実際、X氏の左手は心の水準器として役に立っているのだ。どうして？ 利き腕でない手は、自由に動かない分だけ、繊細で、正直で、わずかな変化をも敏感に察知して、反応するのだ。切符を買うとき、煙草を喫うとき、傘をもつとき、コップをもつとき、X氏は左手を使う。自由に、自然に、異和感がなく左手の動く日は、心が静かで、調子がよい。なめらかな左手の動きは、気分のよい証拠だ。左手の調子で心の流れが読みとれるのだ。

その左手が使えない。まったく、どんなささいなことでも、気分がかわり、心を傾斜させるには充分な兇器となってしまう。あとで原因を探ってみてもわかるはずがない。理由は無数にある。1本のヒビ割れが、結局は、無数のヒビ割れとなって、大事に至る。とるに足りない習慣や癖が封じ込められるだけで、その反動は、波紋となって心の暗闇にひろがっている。

X氏は、煙草に火を点け、右手の指で挟んでみたが、すぐに灰皿に押し潰してしまった。上司、同僚、若い女子社員までが、X氏の暗い顔と機嫌のわるさを、白い繻帯と結びつけて、いったい、何があったのかと執拗に訊ねるが、X氏は、なんでもないと答えながら、ただ左手が使えないのが辛いだけだと自分に言いきかせた。白い繻帯をまいたX氏の左手の話は、その日のうちに、会社中をひとり歩きしはじめていた。

左手を使いたいと思うたびに、X氏の頭のなかに、白くて、繊細な表情をした、自由に、自然に、よく動く女の手が浮かびあがった。

会社が終った。結局、今朝、自分の存在が低くなっていると思った、あの感覚にまちがいはなかったと知った。左手が動いている。

会社でも、電車のなかでも、白い繻帯をまいた左手だけが注目され、X氏は無視された。視線が左手に絡みついてくる。おびたらしい数の眼が左手を視る。X氏と眼が合うと、視線は宙に浮き、汚れたものから遠去かるように離れてしまう。X氏には、その理由がわからない。ただ、眼には、病気は罪だという声の色として現われているようだ。白い繻帯の下には、それがあるという訳だ。人は、不透明なそれを畏れ、隔離し、遠去けたいと思う反面、いったい、それが何なのか、一度でもいいから覗いてみたいのだ。人は視ることが好きだ。一切を視たいと思っている、好奇心の塊りだ。歩行者たちは、X氏自身を視ているのではない。何か、区別のつけられるもの、変化するもの、アクセントのあるもの、それを瞬間的に捉えるのだ。境界のない、長い長い雨など見たくもないのだ。まったく変化のない、欠伸ばかりで日々にはうんざりしているのだ。決して、特定の誰か、何かを見たいのではない。何だって、誰だって、かまわないのだ。ただ、少し眼にアクセントをつけたらだけだ。だから、関係は、視線のなかにしかない。

X氏の白い繻帯をまいた左手も、単なるアクセントで、視線の餌食になっているだけだ。似たものの間でしか落着かない意識が、ちがったものを求めるといふ行為が、欲望としての人間を形成し